

令和5年度 第1回本郷新記念札幌彫刻美術館運営協議会

議 事 録

日 時：令和5年8月22日（火） 午後14時00分～午後15時00分

会 場：本郷新記念札幌彫刻美術館 本館 研修室

出席委員：高橋大作（札幌彫刻美術館友の会会長）、國松明日香（彫刻家）、佐藤郁絵（札幌市立大倉山小学校PTA）、紺野高裕（札幌市立三角山小学校校長）、浜部公孝（札幌市市民文化局文化部文化振興課事業調整担当課長）、嶋田雅人（彫刻美術館課長）以上6名

欠席委員：児玉聡夫（宮の森明和会会長）

所 管 課：菅原真二（札幌市市民文化局文化部文化振興課振興係長）

河野貴寛（札幌市市民文化局文化部文化振興課振興係事務職員）

事 務 局：吉崎元章（本郷新記念札幌彫刻美術館館長）、梅村尚幸（事業係事務職員/学芸員）、柳原潤（業務係事務職員）、白浜玲（同業務係事務職員）

次 第：1 開会

2 議事

（1）令和4年度事業報告（総括）

(2) 令和 5 年度事業経過報告 (4 月～7 月)

当日配付資料：

- ・「2022 事業年報」(P4「管理運営事業」P58～79「主催事業彫刻美術館事業」)
- ・「本郷新記念札幌彫刻美術館令和 5 年度事業経過報告」
- ・「本郷新記念札幌彫刻美術館 令和 5 年度入館者アンケート集計 (2023 年 4 月～2023 年 7 月)」

・ほか配付物

「鈴木吾郎展」チラシ、「本郷新記念札幌彫刻賞募集」チラシ、「彫美連続講座」チラシ (ドイツのお城、アルテピアッツァ美唄)、「館長の日曜講話-彫刻編-」チラシ、「サンクスデー」チラシ、「生命体の存在」チラシ、「館長の日曜講話-札幌の美術編-」チラシ、「年間スケジュール」

議事内容：

(1) 令和 4 年度事業報告 (総括)

事務局より配付資料に基づき、令和 4 年度の事業について報告を行った。

(2) 令和 5 年度事業経過報告 (4 月～7 月)

事務局より配付資料に基づき、令和 5 年度事業経過報告 (4 月～7 月)

の事業について報告を行った。

(3) 令和 5 年度事業計画報告

事務局より配付資料に基づき、令和 5 年度事業計画報告を行った。

(4) アンケート集計報告

嶋田委員より、配布資料に基づき、アンケート集計 (2023 年 4 月～7 月) の結果

報告を行った。

（５）意見交換

浜部委員：雪像彫刻展の会期が、さっぽろ雪まつりと違う時期に設定しているのは何か意図があるのか。

吉崎館長：雪像を作る方が市民雪像の指導に当たっているためこの時期にしか開催ができない。雪まつりにも造形作品としての雪像というのを知ってもらう機会という形で作ればよい。

高橋委員：館長の日曜講話は、より多くのひとに聞いてもらうために、SCARTSなどでやることはできないのか。また、高校や大学生など若い人たちに聞いてほしい。単に一芸術家だけではなく北海道にはこのような人物がいたという歴史を知ってもらうことも重要なことである。

吉崎館長：最初の構想としてはここの本郷新の美術館に愛着を持ってもらいたいという発想であったが、多くの方に聞いてもらうことを考えると考え直してもよい。

国松委員：館長の日曜講話に関して「記録」はどのようにとっているか。講演会に来れなかった方が、ここの美術館のブースでセレクトして聞くことができるという。ここの地域に足を運んでもらうということが重要になり、そのため多くのひとが聞けなくなるということの補完のために「記録」ということがあげられる。吉崎館長の研究していることを美術館に残しておくということも将来大事な財産になるのではないかと。鈴木吾郎展も佐藤忠良とのつながりや西高との関係など、ここで展覧会を開くということの意義を感じられる。将来的には美術館のひとつ

の核として位置づけてほしい。前回の NewEyes など企画のバリエーションを感じられる。本郷新記念札幌彫刻賞にもより多くの応募者が集まるために工夫はないのか。

吉崎館長：記録はとっていないが、パワーポイントなどいつでも再現はできる。

著作権問題などもあるので検討して行きたい。彫刻賞はSNSでの発信、大学の研究室への直接的なアプローチなどを行っている。

紺野委員：幅広く色々なこのことをやっていて驚いた。アンケート集計から来館者がいかに満足感を持っているかということがわかる。地域とともにある美術館であり、これからも地域で育つ子供たちが親しみやすい愛着を持てる彫刻美術館であってほしいと願っている。

佐藤委員：館長の日曜講話なども芸術に興味がない人などへも別の切り口をもって体験できたらよい。アンケート結果より、車いすはという意見があったが、段差がある狭い空間だから世界観が章ごとに変変わった感じがわかりやすかった。

嶋田委員：全国的にもめずらしい彫刻だけを扱った美術館であり、地域の方たちの日常に結びついた美術館である。一方で広く札幌だけではなく日本中にこの美術館の存在感を広めていく必要があるのではないか。